

人や地域と交流を case2

世界とつながるニッポン

日本の地方自治体がオリンピック・パラリンピックに参加する国や地域のホストタウンとなり、大会前からスポーツや文化、経済などを通じた交流を行っている。



前橋によろこそ!

2月に開かれた地元の幼稚園での交流会。子どもたちが選手たちと徒競走やレクリエーションを楽しんだ。



長期合宿にはコーチ1名、パラ選手1名、女子選手1名、男子選手2名の計5名が参加。「大会で結果を出して母国に希望を与えたい」と意気込む。



研修生が中学校を訪問し、技術科の授業に参加。一緒に木工作業を行った。



いい泳ぎだったね

事前キャンプでパラオの水泳ナショナルチームの選手と市内の小学生が交流。



パラオで環境ワークショップを実施。パラオの小学生がオリジナルエコバッグを作った。



南スーダン × 前橋市 [群馬県]

市民が一つになって選手たちを応援!

文●松井 健太郎



1月4日、亀泉町の餅つき大会に参加。地域の人たちと餅つきを楽しんだ。

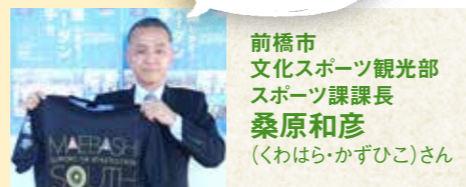
前橋市はホストタウンとして、オリンピック・パラリンピックに出場予定の南スーダンの4名の陸上選手とコーチ1名を、2019年11月から長期合宿のかたちで受け入れている。一般的に選手団の受け入れは選手村に入村する1〜2週間前からだが、紛争が続く南スーダンでは選手の練習環境が整わないことから、同市の山本龍市長が来日の前倒しを提案。「JICAが南スーダンで取り組む『スポーツを通じた平和促進』に前橋市も寄与できるなら」と、長期合宿が実現した。

長期の受け入れには資金も必要だ。市では、多くの人々からの応援を期待してふるさと納税を活用。選手たちのトレーニングや滞在費用を募り、1300万円以上（3月5日現在）の寄附が集まった。選手には前橋市陸上競技協会から4名のトレーニングコーチがつ



市民のトレーナーと通訳が練習を常時サポートしている。男子1,500mに出場するアブラハム選手は「専門的な指導を受けるのは初めてで、感謝している」と話す。

大会後も、人的、文化的な交流を検討していきます!



前橋市文化スポーツ観光部スポーツ課課長 桑原和彦 (くわはら・かずひこ)さん

有志団体が製作した応援Tシャツを手にする桑原さん。売上金は市に寄附される。



前橋市へのふるさと納税はこちら
「ふるさとチョイス ガバメントクラウドファンディング®」

き、23名の通訳ボランティアとともに無償で指導やアドバイスを実施。練習が行われる玉山運動場では、近隣の中学や高校の陸上部の生徒と声をかけ合ったり、一緒に写真を撮ったりしている。女子100メートル走に出場予定のモリス・ルシアさんは同じ高校生の陸上部員と友達になり、メールでやり取りする仲になっているそうだ。

休日には町内の餅つき大会に参加したり、小学校を訪問して子どもたちとふれあったりするなど、地域の人と交流する機会も多い。「生まれたときから紛争状態にある選手たちですが、悲しみや苦しみを背負いつつも、前橋で一生涯懸命練習に打ち込んでいます。そんな姿を目にする市民にとっても、平和や多様性について考える貴重な機会になっています」と前橋市スポーツ課課長の桑原和彦さんは、選手たちの活躍に期待している。



パラオ × 常陸大宮市 [茨城県]

未来につながる交流のスタートに



パラオで行われた日本フェアでは、常陸大宮市の伝統和紙「西ノ内紙(にしのうちし)」を使ったぶんぶんゴマ作りを実施した。



茨城県常陸大宮市政策審議室 企画政策課 東京オリパラ推進室 本多美月(ほんだ・みつき)さん(中央)

日本について学びながら選手団のサポートも担う研修生の受け入れや事前キャンプの誘致、両国の交流イベントなどを行っている。

JICA 海外協力隊員としてパラオで陸上競技のナショナルチームのコーチを務めた本多美月さんは、その知識と人脈を買われ、19年9月から同市の職員としてホストタウン事業に携わっている。配属先の関係機関だったパラオ・オリンピック委員会との連絡調整や、テレビ電話を活用した小学生同士の交流などに取り組んできた。

そのなかで感じたのは、相手への理解を深めることが20年以降の両者の関係深化につながるということ。研修生と一緒に、常陸大宮の魅力をパラオへ発信するフェイสบックを開始した。一方でパラオをよく知る人を招いたセミナーを3回開催。最後の回では同市とパラオの継続的な交流について考

える機会を設けた。「それぞれの伝統工芸による技術交流や廃校を利用したパラオ交流館の開設などの意見が出て、とても盛り上がりました」と本多さんは語る。

今後は、大会直前のトレーニングの受け入れや選手団との交流、応援PRなどのパラオ応援キャンペーンを行う予定だ。「以前、常陸大宮市で選ばれた市民ランナーが、パラオで開催されたランニングイベントに参加しました。言葉が通じなくてもおたがいを尊重、尊敬し、走り終わった後に握手し合う両国の選手の姿にスポーツの可能性を感じました」。今回のホストタウン事業でも、スポーツを起点にパラオと常陸大宮の市民同士の交流が生まれている。「おたがいを身近に感じることで、今の子どもたちが大人になる未来にまで続く交流を、20年以降も多面的に進めていきたいと思っています」。